

なぜ、スレイドは医者なのか
——『世界の真上で』における〈新しきもの〉
(Why is Slade a Doctor?:
“New Things” in *Up Above the World*)

外山健二

1 はじめに

ポール・ボウルズ (Paul Bowles, 1910-1999) は、アメリカ合衆国で生を享けた後、モロッコに定住した作家として知られている。だが、彼はモロッコに生活の根を下ろしながらも、セイロンなどのアジアに移動を繰り返し、さらには中南米にも移動している。その中南米を舞台にした小説が、『世界の真上で』 (*Up Above the World*, 1966) である。

1934年11月、ボウルズがスペインのカディスから乗船したコロンビアのブエルト・コロンビア行きの船は、カリブ海に浮かぶクラサオ島に停泊したと言われる。このクラサオ島で、ボウルズ自身が『世界の真上で』の登場人物グローバー・ソトが使用するマリファナを初めて使ったのである。同時に、同年12月にはボウルズは、船でコロンビアの北東部に位置するサンタ・マリアへと移動する。その近くに位置するバランキージャで、彼はアメーバー症という伝染病の一つに罹患する。そのため、彼は再びサンタ・マリアに戻ることを余儀なくされ、そこの高地にある農業開拓地で静養生活に入るが、この高地での病気の回復期の生活を回想しながら、ボウルズはこの小説を書いたとされる (Caponi 75)。

また『世界の真上で』における登場人物テイラー・スレイドはアメリカのサンフランシスコから中南米のある国にやって来た医者として設定されているが、その訪れたある国で話されていた言語はスペイン語であり、サンタ・マリアは1525年にコロンビアで初めてスペイン居住地となった場所であった。さらにいえば、そこでスレイドはインディオ (先住民) に出会っているが、ボウルズはインディオに実際に出会うためカディスからコロンビア行きの船に乗ったとも言われている。このように考えると、この小説の舞台はコ

ロンビアと推察されるが、コロンビアでの経験以外の出来事も時間・空間を超えた要素として『世界の真上で』において、多様に混ざり合っていることも事実である。というのも、1937年から翌38年へのボウルズ夫婦の新婚旅行によるコスタリカやグアテマラの体験は、『世界の真上で』に反映されていると考えられるからである。さらに、将来ボウルズの妻になるジェインが、メキシコで病気になり、病気と中南米の結びつきがボウルズのなかで一層強くなったとも想像されるからである。このような経緯を経て、1938年に二人は結婚している。そして、この小説には、スレイド夫婦があたかもボウルズ夫婦であるかのように登場する。『世界の真上で』はもともと「スレイド夫婦の赴くところ」(“Where the Slades Went”)という標題であったことは付記すべきであろう。

こうした体験をしたボウルズは、1930年代の中南米を舞台とした『世界の真上で』を1963年に書き始め、その内容は病気が中南米という地域、特に、ボウルズが静養したとされるコロンビアの農業開拓地と結びつけられている。このことは、なぜボウルズがスレイドを医者にしなくてはならなかったかを知る手掛かりになる。読み進めていくと、医者スレイドは病気と関係をもつことになるが、それもこの小説のなかで大きな意味をもつ出来事であるとも考えられる。これらの視点から、『世界の真上で』において、なぜスレイドが医者であることが必須であったのかを探る手段として、〈新しきもの〉を論証する必要がある。この〈新しきもの〉とは、単にそれまでに存在しなかった〈もの〉のみを指すのではなく、社会的な背景や生命に対する倫理観、さらには物質文明の在り方等々、この作品を根底から支える〈もの〉としてボウルズが意図的に組み込んだ〈もの〉と考えられる。それを以下に検証していきたい。

2 『世界の真上で』への問題提起

まず、『世界の真上で』が、一般にどのような解釈がなされているのかを述べたい。スレイドに寄り添うように登場するのが、彼の再婚相手のデイ・スレイドである。デイはスレイドと共に、中南米に存在すると設定されている街プエルトファロールに船で到着した後、ホテルに宿泊し、プエルトファロールへ向かう船上で出会ったレインマントル夫人と再会する。レインマントル夫人は、後にスレイド夫婦の運命を左右することになる、息子グローバーに会うためイギリスからこの地を度々訪れているカナダ国籍の人物である。プエルトファロールに到着した翌朝、スレイド夫婦は、汽車に乗るた

め、レインマントル夫人に声もかけずにホテルを出発するが、後日スレイドは、自分たちが宿泊したホテルが放火され、レインマントル夫人が死んだことを新聞で知ることになる。

その後、別の街に移動したスレイド夫婦は、レインマントル夫人殺害を隠蔽しようとしたグローバーの姦計に落ちることになる。妻は一人になったときにグローバーの手下の召使に麻薬を飲まされ、スレイド自身も郊外の村で麻薬を飲まされるのである。この物語の後半になって、グローバーの計画が次のように明らかにされる。

ふたり [スレイド夫婦] に LSD を飲ませ、スコボラミンやモルヒネの注射をたくさん打ち、意識を失わせたり、再び戻したりし、そしてその計画のそれぞれの段階に音響効果を与えた。¹ (205)

グローバーは麻薬の一種である LSD をスレイド夫婦に飲ませ、しかもスコボラミンやモルヒネといった麻薬を注射したことが分かる。さらにグローバーは、テープレコーダーに録音された音により、麻薬によって生じる幻覚作用を高めている。

ボウルズはこうした中南米を舞台にしたサスペンスともいべき小説を書いたのだが、中南米時代のボウルズの内面には何が起きていたのだろうか。異国の地で無垢なアメリカ人が死に向かって破滅する (Sawyer-Lauçanno 374) という捉え方では、この問いに答えることは難しい。バーテンズは、北アフリカを舞台にした小説に飽いたボウルズが、「殺人の神秘」を描くことを決意し、『世界の真上で』に着手したとし、この作品を「心理学的スリラー」と位置付ける (Bertens 171)。グローバーによるレインマントル夫人殺害の関与やスレイド夫婦への麻薬投与による病気の発症などが、バーテンズの説く心理的要素を示す一例となるが、さらに次の事件もその具体的好例として挙げられる。スレイド夫婦がプエルトファロールで宿泊するホテルには、レインマントル夫人も宿泊していたが、スレイドはそのベランダの一番端の部屋から酒を酌み交わす二人の男の声を聞いており、その男の一人の声はグローバーの友人ソーニーのもので、彼はレインマントル夫人に麻薬を飲ませようと企んでいたのである。このようなプロットが、バーテンズをして心理学的スリラーと言わしめた要素である。

また、パテソンは『世界の真上で』における「脅威の側面」の存在に言及し、この作品の狂気性と暴力性を指摘している (Patteson 43)。パテソン

は、この狂気性を『世界の真上で』という標題²と関連付けている。グローバーは、自分の家を「エデン」(85)と呼び、自分自身も天上の世界に君臨する神と同等に考える。つまり、グローバーは、自分の家が「世界の真上」にあると考え、その己が支配する「世界の真上」の家における狂気性がこの作品では描写されている。「世界の真上」に展開される狂気性は、スレイド夫婦に降りかかる不条理を帯びた災難として具現化されるのだ。

何故、グローバーは、そうしたことを行わなくてはならなかったのであろうか。これをボウルズの小説に見られる実存主義的要素や虚無主義的要素として議論する論考(Bertens 5)は多いが、バーテンズの指摘する「殺人の神秘」と中南米という舞台の結びつきを明らかにしている論考はない。仮に、「世界の真上」がグローバーの「エデン」であったとしても、それだけでは、何故、舞台が中南米であることの必然性が説明されない。

しかも、注目しなくてはいけないのは、スレイドが医者ということである。ボウルズは、初めてこの小説で、明確な職業を持つ登場人物を設定した。『世界の真上で』以前の作品『シェルタリング・スカイ』(*The Sheltering Sky*, 1949)における登場人物ポートの職業は明確でなく、『雨は降るがままにせよ』(*Let it Come Down*, 1952)のダイアーも銀行員を退職した無職という設定である。さらに、ポートは所持金が切迫した経済状況にあり、またダイアーはアメリカからタンジールに仕事を探しに来た人物とされており、裕福な医者であるスレイドとは対照的な人物である。スレイドの医者という設定は、ボウルズの従来作品とは異なるのである。さらに、医者という設定に加え、中南米という場所の設定が、ボウルズのこれまでの作品からすれば異色である。したがって、「中南米」「医者」、そして新たに当時の中南米の社会構図という点にも言及しつつ、それらの設定について検討し、そこから『世界の真上で』における「神秘性」を〈新しきもの〉という視座から解き明かしたい。

3 犠牲者と病気

『世界の真上で』では、冒頭からスレイドがコーヒーを飲む場面が描写される。レヴィ＝ストロースは『悲しき熱帯』において、アメリカのためにコーヒーを、1930年代に生産し続けたブラジルについて次のように記述する。

人間はまず、耕すために茂みを切り払った。しかし数年後には、養分を吸

い尽された上に雨で洗い流された土地は、もうコーヒーの木を受け付けなくなってしまう。その結果、農園はさらに遠く、土地がまだ人間によって汚されない肥沃な地方に移された。人間と土地のあいだに、旧世界では一千年の親密な結び付きをつくり上げ、その中で人間と土地とが互いに凌辱され、それから破壊された。強奪に似た農業が、横たわっていた富を掴み、幾らかの利益を雀り取ったのちに、他の場所へ移って行くのであった。(Levi-Strauss 92)

ここからは「互恵関係」の欠如を読み取れるが、この欠如こそが『世界の真上で』の状況を暗示するだろう。現在のコロンビアは世界的なコーヒーの輸出国であることは周知の事実であるが、コーヒーは飲料物というだけではなく、中南米の1930年代の状況をも示している。中南米のコーヒーはアメリカの市場に依存していたため、1929年の世界大恐慌による大暴落は、中南米のコーヒーの価格をも暴落させ、失業者の増大とストライキを生じさせた(ガレーノ 203)。この時代に中南米の各国の独裁者は庶民の声を制圧した。ニクラグアのゲリラ指導者の闘争は、農民による土地奪還要求であり、アメリカの侵略軍に対するものであった。エルサルバドルにおいても、1932年に農民の決起が起き、インディオはアメリカを背後に恃む当時の独裁者マルティネスが派遣する兵士の機関銃と闘った。グアテマラにおいても、労働組合の指導者が大量に銃殺され、ジョン・ドス＝パスス(John Dos Passos, 1896-1970)が『北緯42度』(*The 42 Parallel*, 1930)のなかで言及したユナイテッド・フルーツ社による労働者の賃金引下げ要求が労働組合の抵抗につながったのである。

アメリカから来たスレイドが中南米で飲むコーヒーという記号は、アメリカによる中南米支配を示していると読める。スレイドがコーヒーを飲む姿は、帝国主義の地政学的概念で言及される「中央アメリカはアメリカ合衆国の自然な付属物」(ガレーノ199)としてインディオには見えなかつたかも知れない。つまり、中南米はアメリカに支配されている地域の典型であり、インディオにしてみればスレイドは支配者に他ならなかつたのである。ここに、この小説の舞台が中南米であることの必然の一端が垣間見える。

しかし、コーヒーを飲むスレイドの姿は医者として『世界の真上で』において機能することはない。スレイドが医者として機能する気配を感じさせる場面が唯一つあるとすれば、それはグローバーがスレイドへ麻薬投与の罌を仕掛けるところである。それは、グローバーのアメリカ人の友人が病気にな

り、自国の医者しか信用できないそのアメリカ人からの要望により、グローバーと共にスレイドがロスエルマロスへ向かう場面である。スレイドが医者として到着した村は、中南米の1930年代を示しているかのように「作業服を着たインディオが片手にライフルを持ち、大きな門を内側に開けた」(106)状態の緊迫した空気の漂う村である。しかし、アメリカ人の患者がその村に存在しなかったため、スレイドをデイから引き離すグローバーの罠であったことがそこで判明する。アメリカ人の患者が現地の医者ではなく、アメリカ人医師をわざわざ求めたその理由がここで初めて明らかになったのである。スレイドは医者として機能することはない。スレイドは中南米において犠牲者として機能する。スレイドと同様にデイも犠牲者となる。デイは無意識に麻薬を飲まされ、「ほんとうに気分が悪いわ」(115)と感じる。

ここで、「病い」(illness)³に関する定義を問題としたい。デイは「病い」という感覚で自分の症状を捉えており、麻薬を飲み物に混ぜて飲まされたという意識はなく、現地の流行病の一つであるマラニアにかかってしまったのではないのかという恐怖を感じている。しかし、実は、デイと共にスレイドも麻薬を飲まされ、そのことによって〈ニューボルド病〉(Newbold Disease)という「疾病」に侵されていたのである。

作中では、この〈ニューボルド病〉は「病い」ではなく「疾病」(disease)と定義されている。そして、その診断を下したのは現地の「最高」とされる医者である。問題なのは、「最高」の医者がスレイドを診断したことにある。スレイドを診断した医者を「最高」とどのように判断できるのか。当然、「病気」(sickness)を治せる医者が「最高」という評価を与えられるわけだが、現地でのその評判のよい医者が〈ニューボルド病〉という病名を米国からやってきた医師のスレイドに与えたのである。換言すれば、その「最高」の医者がスレイドの「病気」を発見し、病名からその治療方法を選択し、治療を施したことになる。

医者の良し悪しは「近代医療」の基準からなされていることになる。汽車の一等客室で「大きな豚革の旅行鞆」(140)を網だなにレインコートと一緒に載せる医者が、その病気を診断する。その医者は、評判がよく「最高」の医者として知れ渡っているので、国内の都市部に在住し、住民には信頼を得られている。この医者は、西洋的近代医療で中南米の住民をこれまで診断してきた医者である。

因みに、クレイマンは医療人類学の立場から「病気」を「病い」と「疾病」に分類する。「病い」とは「知覚された疾病の心理社会的な体験のされ

方や意味づけ」(Kleinman 72)であり、「疾病」とは、「生物学的プロセスと心理的プロセスの両方あるいは一方の機能不全」(Kleinman 72)である。スレイド夫人の「気分が悪い」という体験は「病い」であり、医者診断による「定義」が介入すれば、その「病い」は「疾病」と分類される。

4 医者とその診断

なぜ、スレイドは医者なのか。スレイドは医者として機能しないからである。スレイドは医者としての資格を所持しているとしても、診断を行わない隠遁した医者という設定である。あるアメリカ人の患者を診察するという虚偽の設定でさえ、スレイドは実際に診断することはない。それどころか、グローバーによってスレイドは麻薬中毒に巻き込まれる。現地における医者スレイドは〈ニューボルド病〉と診断されたが、医者スレイドはその病名を聞いたこともない。その病名から自分がいかに対処すればよいのか、医者スレイドさえ判断できない。つまり、〈ニューボルド病〉という病名はスレイドには全く対処不可能な病気なのである。

では、この作品において唯一記述される「疾病」である〈ニューボルド病〉とはどのような病気であり、どのような意味づけが可能なのか。その病気を初めて語るのはスレイドが車で移動しているとき、向かい側に座った見知らぬ医者である。その医者によれば、その病気は「記憶喪失」を伴い、「雷のように突然襲ったかと思うと、すばやく過ぎ去ってしまう」(141)症状があり、「ニューボルドという人がウィルスを数年前に隔離培養」(141)した病気であるということであった。スレイドと車で出会った〈ニューボルド病〉を語る医者は、車を降りてからスレイドと共にメスティソ(スペイン人とインディオとの混血)が経営すると思われる農場に向かい、そこで「まさにこの農場でニューボルド病の患者のめんどうをみた」(143)と語るのである。アメリカ人の医者であるスレイドには分からない病名でありながら、中南米のある都市から車に乗り、降りた駅から近い農場へやってくる医者であれば分かるのが〈ニューボルド病〉なのである。この現地の医者からすると、「ぼくの場合、病気といえば全快しないものをさします。幻想や発作なんかのようなものだね」(143)と語る。しかし、この医者が診た〈ニューボルド病〉にかかった患者は次のような病状であった。

この病気にかかった友人は重症でした。でも信じがたいものだったな！五日後に起き上がって、駆け回っていたんですからね。まるでなにも起こら

なかったかのように。ぼくはそいつが全快するなんて思わなかった。

(143)

この医者〈ニューボルド病〉として診断すれば、この診断の際には、この病気は全快しないと考えられる。だが、この医者は〈ニューボルド病〉でさえこの地域では全快もあり得ると認識する。「診断」という医療行為に「揺れ」が生じている。都市部から汽車でやってくる医者は、はじめてこの地でこの時〈ニューボルド病〉であるとの患者を診断したと推測できる。

〈ニューボルド病〉という「疾病」はニューボルドという人物に因んで名づけられたことが分かるが、『オクスフォード英語辞典』(OED)によれば、ニューボルド病の〈ニューボルド〉は「新しく建設された住居に住む人の愛称」でもある。「新しい土地での新しい病気」が〈ニューボルド病〉という名の原義である。特定病因説を旨とする近代西洋医療は、症状についての原因を突き詰めるという性格をもつ。近代医療を修めたこの医者には、かつて見たことのない症状が展開されるその疾病に原因を見出し、病名を命名することが迫られていた。〈ニューボルド病〉は、まさにこの土地で「新しく発生した病気」としてその医師に病名を与えられたのである。

ここで改めて、スレイドがなぜ医者であったのかを考察したい。それは、彼が医者として機能しなかった、否、機能できなかった姿にヒントを求めることができる。彼は、アメリカの支配していたコロンビアにおいて、彼の積み上げてきた医学的技術や知識が役立たないことを思い知る。つまり、彼の罹患したものは、まさしく〈新しきもの〉だったのである。同じ医師として自分よりも劣るコロンビアの医師に診断され、治療を施される。それは、中南米という土地で、彼が〈新しきもの〉に遭遇した結果に他ならない。同じ医師から診断や治療を施されるという目論見のため、スレイドは医者でなければならなかったのである。

5 グローバーの名から社会構図と医療へ

〈ニューボルド病〉は、この地での〈新しきもの〉であった。当時の中南米の社会構図から〈ニューボルド病〉という病気を考えることができなだろうか。その社会構図はその「病気」といかなる関係があるのか。

以上を考えると、この小説の主人公的存在のグローバーが大きな鍵となる。グローバー (Grover) は、ソト (Soto) とグローブ (Grove) として名称を使い分けながらこの小説に登場する。この名称の使い分けを、幻想的な

個性の反映 (Caponi 77) と捉えることで留めておくことはできないだろう。ソトが使用されるときは、家柄が重視され、畏まった態度がそこから読み取れる。グローバーは新聞売りからはソトさんと呼ばれ、その新聞売りはスレイド夫人に「立派な若者」(55)としてソト氏を紹介している。スレイド夫人との初対面の際にも、彼は自分をソトと呼び自己紹介している。ソトという姓は、名家出身の父親ホセ・ガルシア・ソトとして登場する。因みに、1876年から8年間政権の座に就いた中年米のホンジャラスの大統領はマルコ・アウレリオ・ソト (Marco Aurelio Soto) であったが、グローバーと同姓のソトであることは偶然ではないだろう。

グローブ (Grove) という名は、明らかに地政学的には、小森・木立 (グローブ) に住んだ人に名づけられた名である。その意味を具現化するように、現地住民が居住する川に沿った土地、牧草地、コーヒー園などでスレイド夫婦やその住民であるインディオなどからグローブと呼ばれる。

以上の名称から、この地の社会構図が見えてくる。というのも、スペイン侵略以後の中南米では人種を基準にした身分社会が形成されたからである。ソトという名前からは家柄や血統を読み取ることができ、彼はモーターボートをスペイン人の父親に買ってもらえる家系であることが分かる。「魅力的にビーチウェアに身をつつみ、椰子の木の下にとめたスポーツカーのそばに立っている美しいカップルが写っている」(136) カラー写真の世界である。地元住民よりは階層が上層である特権意識を表面に出す時にグローバーはソトを使っており、同時にそのように呼ばれていることから、家系を重視する上層階層を表象する名がソトと位置付けをできる。

一方、グローブという名は、スレイド夫婦や地元住民を通して呼ばれる名前であり、インディオなどには親しみのある名称と捉えることができる。グローブという名は、上層階層の人々から呼ばれるというよりは、スレイド夫婦のような観光客やインディオなどの人々から呼ばれる名前と考えられる。スペイン政府がスペイン人とインディオとの生活を分離する努力をしていることから、グローバーは名前を変えて呼ばれることで、特権意識を弱めた接し方を行っていたとも言える。言わば、この階層は、メスティソが多く住む中間階層とインディオが住む下層階層の社会である。

以上のグローバーの2種類の名称から、それぞれの名は中南米のこの地でグローバーが生活実践をする際の立ち位置であると言えるだろう。この立ち位置は医療のあり方とは関連はないのだろうか。ソトという名前から表象される上層階層には近代医療が持ち込まれていると考えられる。ソト大統領が

ホンジャラスに総合病院をつくった背景があるように、1930年代には中南米に近代医療が都市部には持ち込まれていたと考えられる。ソトという名は植民地支配階層であり、中南米のある都市部に住居を構える。この層では、近代医療が持ち込まれた都市部の病気の捉え方が支配する。西洋医療を実践する医者が絶対的権力を持ち、その医者が治療を行う医療システムが支配する社会の存在がソトという名前から見えてくる。

グローブという名は中間階層と下層階層の表象であった。近代医療が権威を維持しながらも、長年受け継がれた伝統的な医療をも継承する中間階層や下層階層をそれぞれグローブが表象すると考えていいだろう。

さらに、当時の中南米の複雑な階層社会を表すために、ポウルズはグローバーに、ベロ (Vero) という名前も与えている。ベロという名は、グローブからグロベロへ、そしてベロに変化したと推測でき、ベロと同居する17歳のルチータからそう呼ばれる。この呼び名ベロはラテン語の“verus”と密接な関係があり、「真実」(Caponi 77-8)を意味する。ソーニーからもグローバーはベロと呼ばれる。ソーニーはベロとは親しい間柄である。特に親しい間柄では、グローバーはベロと呼ばれている。

ベロの父親は息子を日曜礼拝に連れていくカトリック教徒であり、不可知論者⁴でもある。カトリックを信望すれば、「〈精神〉を除くすべてのものは再生の観点から考えられる」(91)のである。しかも、彼の父親は不可知論者のためか、大学に行かせるよりは、息子に農園管理という「実践的な経験」(92)を重視する立場である。父親は、信頼のおけるソーニーに農園の現場監督という「経験」をさせ、そのソーニーからグローバーはベロと呼ばれている。ここから判断しても、「真実」の世界では、「経験」が「再生」を生成するのであり、「精神」は再生されないということが訴えられているとわかる。「精神」に宿るのは「記憶」であるが、スレイドは麻薬によって記憶喪失に陥った。そこでは経験も忘却される。具体的には次の引用がある。

彼 [ベロ] のプライベートな世界は、推量の範囲にとどまるものであったが、自分 [デイ] やテイラーが入る余地などないことはたしかだった。その領域では、二人 [スレイド夫婦] は人間ではなく、ものとみなされるのだ。(156)

スレイド夫婦は、ベロにとっては〈新しきもの〉であり、しかも〈も

の)であるため、麻薬によって殺害された。スレイド(Slade)は“slayed”(殺害される)の運命であった。それも「真実」の世界で行われた。ベーロにとっての私的な世界とは「真実」の世界のみであり、ソーニーはレインマントル夫人殺害の「経験」をもった実行犯であるという「真実」がそこでも明らかになる。この小説の神秘性の主要素であるレインマントル夫人殺害という「神秘」が明らかになるのは「真実」の世界においてのみであって、経験を伴ったこの「真実」の世界だからこそ、『世界の真上で』の神秘性は解かれるのである。実行犯のソーニー(Thorny)という名には、“a thorn”(とげ)として機能する「苦痛を与えるもの」という意味が内在していた。

6 おわりに

先述したが、この小説はミステリーとして評価されたり、そのプロットに包含される神秘性に着目されたりすることが多い。しかし、ソト、グローブ、ベーロという3通りの名を一つに収束するグローバーという視点で、この小説を捉えることも、また一つの読み方であろう。ベーロという名で表象される経験を重視する「真実」の世界で麻薬が使用されたが、麻薬によってスレイド夫婦は記憶を失った。この記憶喪失は、麻薬用語では「アップ」“Up”となり、この小説のタイトル『世界の真上で』(*Up Above the World*)が示す世界である。「世界の真上で」の「上」というのは、経験が重視するベーロの世界から変容したもう一つの「麻薬から生じる世界」だったとも考えられる。なぜグローバーがスレイド夫婦に麻薬を用いて記憶を失わせたのかという謎もここに解を求めることができよう。現実の経験のみの世界で生きる人間にとって、〈新しきもの〉としてのスレイド夫婦は〈もの〉以上の存在でなかったが、それ以上に記憶と言う精神的な〈もの〉を看過することもできなかったのではないか。

このように考察を進めてきた。スレイドが医師でなければならなかったことに言及し、当時の中南米における〈新しきもの〉の存在が、この小説のモチーフであることは明らかになったが、それに併せて、ソト、グローブ、ベーロという名を持った一人の人間の精神世界がその背景にあったことも作者の意図の一つであったことは容易に推察されるのである。

註

¹ Paul Bowles, *Up Above the World* (New Jersey: The Ecco Press, 1966). 本稿では引用はすべてこの版を使用し、頁数は本文中に括弧に入れて示す。以下、邦訳として、ポール・ボウルズ『世界の真上で』木村恵子訳（白水社、1993年）を適宜参考にした。

² 「世界の真上」を、木村は次のように述べる。「“Twinkle, twinkle, little star”で始まる童謡「きらきら星」の一節」、星たちの所在を示す“Up above the world so high”という歌詞を思い出させる。麻薬のせいで地から離れた世界、現実から遊離した遠い世界へと飛んでしまい、星のように漂う登場人物たちのいるところをそれは指しているのだろうか（“Up”は麻薬用語でもある）（木村恵子「訳者あとがき」『世界の真上で』223）。

³ 「病い」(illness) と「疾病」(disease) は『オクスフォード英語辞典』(OED) によれば、“illness: bad or unhealthy condition of the body (or formerly, of some part of it)”であり、一方、“disease: a condition of the body, or of some part or organ of the body, in which its functions are disturbed or deranged; a morbid physical condition”である。なお、「病気」は“sickness: the state of being of sick or ill”である。

⁴ 廣松渉他編『岩波哲学・思想事典』（岩波書店、1998年）によれば、「不可知論」とは、「一般に人間が認識できるのは経験に基づいた事実だけであって、経験を超越する究極の实在、絶対者、無限なる者、神といったものは認識することはできないとする立場」（1366）である。

引用文献

- Bertens, Johannes Willem. *The Fiction of Paul Bowles: The Soul is the Weariest Part of the Body*. Amsterdam: Rodopi, 1979. Print.
- Bowles, Paul. *Up Above the World*. 1966. NJ: The Ecco Press, 1982. Print. (邦訳：ポール・ボウルズ『世界の真上で』木村恵子訳、白水社、1993年)
- Caponi, Gena Dagel. *Paul Bowles*. New York: Twayne Publishers, 1998. Print.
- Kleinman, Arthur. *Patients and Healer in the Context of Culture: An Exploration of the Borderland and between Anthropology, Medicine and Psychiatry*. Berkeley: University of California Press, 1980. Print. (邦訳：アーサー・クラインマン『臨床人類学—文化のなかの病者と治療者』大橋英寿／遠山宜哉／作道信介／川村邦光訳、弘文堂、1994年)

なぜ、スレイドは医者なのか——『世界の真上で』における〈新しきもの〉

Levi-Strauss, Claude. *Tristes Tropiques*. [1st American ed.] New York: Atheneum, 1974. Print. (邦訳：レヴィ＝ストロース『悲しき熱帯』上下、川田順造訳、中央公論社、1993年)

Patteson, Richard. F. *A World Outside: The Fiction of Paul Bowles*. Austin: University of Texas Press, 1987. Print.

Sawyer-Lauçanno, Christopher. *An Invisible Spectator: A Bibliography of Paul Bowles*. New York: The Ecco Press, 1989. Print

ガレアーノ、エドゥアルド『収奪された大地——ラテンアメリカ五百年』大久保光夫訳、藤原書店、1991年。

*本稿は、既に、常磐大学コミュニティ振興学部紀要『コミュニティ振興研究』2011年第13号に研究ノートとして掲載したが、今回、これに大幅な加筆修正を加えたものである。